
神々を食らう者

リン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神々を食らう者

【著者名】

リンク

N7879Z

【あらすじ】

代々赤き泉の巫女を生み出す一族、そんな一族の長男にして生まれた少年の呪われた宿命と守るべき妹の巫女のために彼は……

魔物あり、剣あり、異世界ファンタジー

10歳と9歳の兄妹

今年一番の積雪を記録した晩の事、少年は少女と共に降りしきる雪の中で

互いに体を寄せ合つて冬の厳しい寒さに必死に抗つていた。

「お兄ちゃん……お腹空いたね……」

空を見上げるよう視線の先で映り込む大きな城を眺めながらポツリと少女はそう呟いた。

少女の息は死神の吐息のように白く空間に漂つた。

「そうだね……」

夜の寒さで手の感覚は消え、意識も朦朧とし始めた。冬に人が死ぬはよくあることだ。しかし、自分にそれが振りかかるなんて

夢にも思わなかつた。

橙色の長い髪を人形のように切りそろえた少女の顔を覗きながら少年は僅かに少女に微笑んだ。

少女はそれを見て首をかしげつつ言葉を返してくる。

「どうしてお兄ちゃんはいつも笑つているの？」

「それは……笑うと胸の奥が暖かくなるからかな？」

「暖かく？　こんなに寒いのにポツカポツカになるの？」

薄いオレンジ色に染まった可愛らしい瞳、まだその目は疑うことを探らぬ純粋な子供の目をしていた。

世界は冷たく凍えるようなのに、少女の瞳は暖かな熱を放ち、生きることを諦めていなかつた。

少年はそんな少女を眺め、優しく頭を撫でた。

細い糸のようにサラサラとした少女の髪を撫でながら長く伸びた石橋の先へと目を移し、王城の光を眺めた。

「そうだよ、笑うと胸が暖かくなるんだ」

「だからお兄ちゃんはいつも笑つてるのか、なら私も笑うー。

今寒いから、お兄ちゃんよりももっと、もつと笑つて
お兄ちゃんの分まで暖かくなつて、お兄ちゃんに
温もりを分けてあげる」

少年はその声を耳にして、胸の底から笑顔を漏らした。
作り笑いでも、愛想笑いでもない。ただ純粹に嬉しかつた。
同時に何を犠牲にしても妹を守る事を胸誓つた。
体を起こし、そのまま少女の手を握る。

「え？」

「ミーシャ、寄り道は終わりにしよう。進むんだ、僕達は。
それが例え茨の道だと知つても、僕達は進まなくちやならない
それが僕達の運命だから。逃げるのはもうやめよう。
生きて、母さんや父さんのぶんまで生きて、生き抜いて
幸せになろう」

「幸せ……」

「そうだ、幸せになるんだ」

「でも……みんな言つてるよ？ 私は幸せにはなれないって……」
「幸せになれない人間なんていない。それはなるうとしないんだ。
頑張つて、頑張つて、頑張り抜けば……きっとミーシャでも
『赤き泉の巫女』でも幸せになれる。兄の僕が言つだからだ間違
いない」

「……なら」

少女の声は極寒の闇の彼方へと消え、二人の兄弟の姿は吹雪へ
と姿を変えた雪空の下へとその姿を消した。
それは降りしきる激しい雪田の出来事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7879z/>

神々を食らう者

2011年12月25日12時51分発行